

二九mである。遺跡の北西側に隣接する龍門寺は、近世・亀田藩主岩城氏の菩提寺であり、寛永五年（一六二八）の開基と伝えられる。発掘調査は道路建設事業に伴うもので、調査面積は二四三〇m²であった。調査の結果、旧石器時代の石器

秋田・龍門寺茶畑遺跡

- 1 所在地 秋田県由利郡岩城町赤平字向山
- 2 調査期間 二〇〇二年(平¹⁴)七月～一〇月
- 3 発掘機関 秋田県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 加藤 竜
- 5 遺跡の種類 石器製作跡・集落跡・墓跡
- 6 遺跡の年代 旧石器時代、縄文時代、近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

龍門寺茶畑遺跡は、秋田県の日本海沿岸中央部に位置し、日本海に直進する衣川右岸に形成された段丘上に立地する。標高は二五〇

ブロックニカ所、縄文時代前期の竪穴住居・土坑、近世の土坑・溝・焼土遺構などが検出された。

近世の土坑SK二〇は、被熱した陶磁器が出土すること、堆積土に焼土・炭化物が多量に混入することから、建物の火災に伴う廃棄坑と見られる。また、大型の仏花器が含まれることから、仏教関連の建物が被災した可能性が指摘できる。

二点の木簡は、木製構造物を伴う土坑SK三〇から出土した。SK三〇は一辺二・六mの正方形で、底面までの深さは一・一五m、周壁の立ち上がりは垂直に近い。平坦な底面直上には、一・八m四方に幅〇・三mの板を六枚敷き、その中央上には六角形の木組みを乗せている。これらの状況から、本土坑は、輿状の木製装具を伴う土葬墓と推測されるが、骨片や副葬品はなく、埋葬部は改葬を受け完全に拔去されたと考えられる。ただし、陶磁器類など時期判定の根拠となる遺物は一切なく、帰属時期は不明である。

8 木簡の釈文・内容

- | | | |
|-----|---|--------------------------------------|
| (1) | $\left[\begin{array}{c} \text{小} \\ \square \square \square \square \square \end{array} \right] \begin{array}{c} \text{縁力} \\ \square \end{array} \circ$ | $311 \times 29 \times 27 \quad 061$ |
| (2) | $\left[\begin{array}{c} \text{板} \\ \square \square \square \square \square \end{array} \right]$ | $(230) \times 17 \times 8 \quad 061$ |

(1)は六角形の木組みに使用された角材で、墨書は下の板敷き部分と接する面に記入され、人名の可能性もある。下端部には釘穴が認められる。

められる。

(2)は板敷き部に使用された薄い板材である。

木簡の釈読は、山形大学の三上喜孝氏のご教示による。

9 関係文献

秋田県教育委員会『龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡』(二〇〇四年)

(高橋 学(秋田県弘田柵跡調査事務所))



(2)



(1)

東北文字資料研究会発行

『第一回 東北文字資料研究会資料集』の刊行

東北文字資料研究会は、東北地方の最新の文字資料について情報交換を進め、墨書土器などを中心とする出土文字資料の新しい研究方法を、文献史学・考古学の両面から議論するための研究会である。昨年十一月、第一回研究会を開催した。この資料集には、研究会当日の報告に関わる、三上喜孝・伊藤邦弘・廣瀬真理子・武田和宏の各氏の論考を掲載するほか、村木志伸氏の編集で、二〇〇一年度に刊行された東北地方の報告書から、出土文字資料を集成している。

(頒価二〇〇〇円(送料別) A4判 一六七頁)

問い合わせ先

東北文字資料研究会事務局

〒九九〇―二四二一 山形市上桜田二〇〇

東北芸術工科大学村木志伸研究室気付

TEL 〇三―六二七―二〇〇〇(内線二三三三)

FAX 〇三―六二七―二三五五